

令和6年度 事業報告書

(事業年度：令和6年4月1日から令和7年3月31日)

1. アルペンスキーチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：	18 回
海外合宿：	0 回
チーム派遣：	1 回

■体制整備事業

強化会議：	3 回
メディカルチェック：	1 回
タレント発掘・育成：	0 回
JPC 等会議出席	2 回
その他：	2 回

■DX 化促進事業	2 回
-----------	-----

(2) 事業の成果

① デフスキー世界選手権大会

今大会において、日本代表選手は以下の成績を収めました。

田苗優希選手：

SG（スーパー大回転）5 位、GS（大回転）4 位、SL（回転）5 位

村田悠祐選手：

PSL（パラレルスラローム）ベスト 8 進出

世界の強豪と競い合う中で、上位入賞を果たしたことは、日頃のトレーニング成果の表れであり、一定の成果と評価できます。一方で、選手たちは怪我や体調不良、欧州選手に比べて短い練習期間、さらに 6 日間連続レースという過酷なスケジュールなど、多くの課題にも直面しました。これらの経験を踏まえ、今後はより計画的かつ柔軟な強化策の導入を図り、国際大会でのさらなる上位進出を目指していきます。

② 強化合宿

世界選手権に向けた事前強化として、長野県および北海道での遠征を実施し、ゲートトレーニングを含む基本滑走を中心とした内容で、選手たちは着実に調整を進めました。特に滑走技術の確認と安定性の向上を目的としたトレーニングは、競技力の底上げに大きく寄与し、実戦への自信と手応えを得ることができました。選手の身体的・精神的な準備を整える重要な機会となりました。

③ DX 強化合宿

最新のトレーニング機器を活用したスカイテックでの集中トレーニングでは、持久力と技術の両面に焦点を当て、選手3名が質の高い練習に取り組みました。初日はインターバル調整による持久力強化、2日目はターン技術の細部にまで踏み込んだ動作確認を実施。これにより、選手たちは自らの身体の使い方やバランス感覚への理解を深め、新たな課題意識を得ることができました。今後の雪上トレーニングにおけるパフォーマンス向上が期待される内容となりました。

(3) 事業に対する評価

① FIS ポイントの取得とレース経験の増加

田苗優希選手がFISポイントを取得するなど、一定の成果が見られました。一方で、男子選手については、国内でのSAJ-Aレースにおける実績が不足しており、FISレースへの出場権を得られない状況が続いていました。この点については、課題として真摯に受け止め、来年度に向けてはFISポイント取得を目指した明確な戦略を策定し、国内SAJ-Aレースへの積極的な参戦を通じて、必要なレースポイントの獲得に努めていく必要があると考えています。また、世界大会規模のレースはその開催数が限られているため、実戦経験を十分に積むには海外遠征が極めて重要です。特に、選手の若年層段階から多くのレースに挑戦することは、技術向上と精神的な成長の両面において効果的であり、今後の競技力向上に大きく寄与するものと考えられます。

今後は、これらの課題と方針を踏まえ、計画的かつ戦略的な活動を展開し、国際舞台での競争力強化を目指していきたいと思います。

② フィジカル強化とスピードの向上と技術の改善

本年度の活動を通じて、男子選手においてはスピードの向上および技術面での改善、さらにフィジカル面の強化が引き続き重要な課題であることが明らかとなりました。現在、高速ターンへの対応力が不十分であるほか、後傾気味の滑走フォームや、積極性に欠ける滑りが散見されており、レース前から消極的な姿勢が見受けられました。このような状況を改善するためには、技術的・戦術的指導に加えて、コーチのもとで体系的なトレーニングメニューを導入し、基礎的な技術の再確認と強化を図る必要があると考えます。

また、大会での敗戦後に悔しさを表現しない選手も見られたことから、精神的な面での課題も浮き彫りとなりました。競技における勝利

への執着心や自らの成長に対する意識を高めるためにも、メンタルトレーニングやフィードバックの機会を充実させ、内面的な成長を促していきたいと考えています。

今後は、これらの技術・フィジカル・メンタルの各要素をバランスよく鍛えることで、選手個々の競技力を総合的に底上げし、より高いレベルでの戦いに備える体制づくりを進めていきたいと思っています。

(4) 課題と今後の取り組み

① 海外遠征実施における課題と取組方法

海外遠征を実施する際、交通費・宿泊費・大会エントリー費用などの外国送金において、金融機関による審査が厳格でした。このため、複数回にわたって銀行と協議を重ねる必要がありました。最終的には送金が完了しましたが、時間と労力を要したことが課題です。

今回の反省を踏まえ、今後は選手や関係者による個別手配を避け、手続きの簡素化および確実性を優先するために、若干のコスト増はあるものの、旅行代理店を通じた一括手配を行いたいと考えています。

② 強化事業予算の不安定性と取組方法

現在、物価の高騰に伴い宿泊費や交通費が増加している一方で、強化事業に充てられる予算は据え置かれており、選手の自己負担が増えるなど、活動の継続や拡充に支障をきたす懸念があります。

そのため、強化事業費への依存を軽減するために、新たな資金源の確保を検討しており、他の助成制度の活用やスポンサー支援の獲得など、外部資金の導入を積極的に進めていきたいと考えています。

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：	8回
海外合宿：	3回

■体制整備事業

強化会議：	2回
メディカルチェック：	1回
タレント発掘・育成：	0回
JPC 等会議出席	2回
その他：	0回

(2) 事業の成果

① 海外合宿の成功と技術力向上

年度初めに実施した中国遠征では、現地のサポートが大きく寄与し、特に太原市スキー協会の范氏によるコース予約やトランスファー手配などの支援がありました。これにより、選手たちは効率よくトレーニングを行うことができました。和田選手は中国の健聴選手との合同練習を通じて滑走スピードが向上し、競技力を大幅に向上させました。また、スウェーデン遠征では硬い雪での練習を通じて技術力が大幅に向上し、和田選手はどのスキー場でも雪質やコースコンディションを恐れずに対応できる自信を得ることができました。これらの海外合宿は、選手の技術力向上とメンタル強化に大きく貢献しました。

② 国内合宿でのフィジカル面の向上

国内で実施した体力測定テストでは、選手たちの持久力が昨年からのトレーニングの成果として着実に向上しました。選手たちは積極的に体力測定に取り組み、フィジカル面への関心が高まりました。測定結果をもとに、オフシーズンのトレーニング計画やウォーミングアップメニューに活用し、冬季シーズンに向けた準備を進めることができました。これにより、競技パフォーマンスの向上が期待できます。

③ 強化試合での高い競技成績

鳥取県で実施した強化試合では、和田選手が中高生クラスおよび全年齢対象で健聴者選手に交じって2位を獲得し、伊藤選手はオープンクラスで初めて表彰台に上がりました。舛田選手も男子一般クラスで6位に入賞し、全体的に高い競技成績を収めました。また、和田選手は全日本ジュニアスキー選手権大会スノーボード競技で初めて予選を突破し、健聴者選手に交じって6位に入賞しました。さらに、北海道スキー選手権大会と全日本スキー選手権大会でも予選を突破し、14位に入賞しました。各選手が高い成績を収めたことで、自信を深めることができ、今後の競技活動への意欲がさらに高まりました。

(3) 事業に対する評価事業に対する評価

① FIS ポイントの取得とレース経験の増加

ヨーロッパ遠征では、和田選手が FIS ポイント未取得のため、すべて下位からのスタートとなりました。来年度は、FIS ポイントを取得するための戦略を立て、より上位からスタートできるように取り組んでまいります。また、日本国内ではレースの絶対数が少ない現状を改善するため、海外遠征を通じた実戦経験を積むことが重要です。特に、若いうちから多くのレースに挑戦することで、競技力の向上に繋がります。

② フィジカル強化と技術の向上

年末年始強化合宿では、舛田選手のフィジカル強化と減量に取り組ましました。来年度は、トレーナー指導の下でトレーニング計画を立て、継続的に取り組むことでさらなる成果を目指します。また、ヒールサイドターンの角付けやスタンス幅、ボードの前後バランスについても最適なポジションを探る段階にあります。これらの課題に重点的に取り組むことで、舛田選手の技術力向上が期待できます。

③ 限界スピードの向上と技術の改善

雪上強化合宿では、伊藤選手がさらなる限界スピードの向上を目指して取り組んでいます。ゲートトレーニングだけでなく、スキー場内の様々なコースでフリーランを行い、多様な雪質や斜度・地形においてもスピードを出せるように練習を重ねます。また、和田選手はフロントサイドターンでの技術向上を目指し、「斜め前に体重を預ける」イメージを持つことで、ノーズ側のエッジがより早く雪面に触れるようにする練習を行います。さらに、舛田選手は「身体を雪面に近づける意識」と「次のゲートへ前の手を動かす切り返しの動作」を自動化するためのトレーニングを続けます。これにより、競技パフォーマンス向上が期待できます。

(3) 課題と今後の取り組み

① 国際強化合宿・遠征の実施と管理における課題

中国およびヨーロッパにおける強化合宿では、スケジュールの調整や手続き（ビザ取得、宿泊、渡航手配など）が煩雑化しています。特にヨーロッパ遠征においては、宿泊施設からの領収書が未発行であったことや、為替レートの記録紛失、現地での事務処理の遅延などにより、事業報告書の提出が遅れるといった事務管理上の課題が発生しました。

【取り組み方法】

1. 合宿・遠征ごとに、現地との契約および書類整備を事前に徹底し、必要書類（領収書、為替レート記録など）を確実に確保できるよう、チェックリストを導入します。
2. 領収書のスキャンデータを日々メールで送付し、国内で領収書の整理が行えるような支援体制の構築を検討します。

② 強化事業予算の不安定性

冬季デフリンピックで好成績を収めたにもかかわらず、次年度の強化事業費が大幅に減額される見込みとなっており、選手のモチベーションの低下や活動の制限が懸念されます。

【取り組み方法】

1. 民間助成金（例：ヤマハ発動機スポーツ振興財団など）への申請を積極的に行い、外部資金の獲得を図ります。
2. 選手および保護者の経済的負担を軽減することを目的として、助成制度やクラウドファンディングなどの費用支援スキームの導入を検討します。

③ ガバナンス・インテグリティ体制の整備不足

ガバナンス・コードに基づく項目（中長期計画の策定、多様性の確保、選考委員会の設置、コンプライアンス体制の構築など）への対応が不十分であり、組織運営の透明性や持続性に課題がありました。

【チームとしての取り組み方法】

パワハラ・セクハラ防止のための定期研修を実施するとともに、外部窓口を含む相談体制をチーム内に整備し、安心して活動できる環境づくりを進めてまいります。

3. スノーボードフリースタイルチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：	19 回
海外合宿：	0 回

■体制整備事業

強化会議：	0 回
メディカルチェック：	1 回

タレント発掘・育成：	4 回
その他：	0 回
■DX 化促進事業	12 回

(2) 事業の成果

- ① 令和 6 年度はケガを抱えた選手などが多く、オンラインは当毎回人数が少ない中、実施となり、オンラインの回数を増やし、オンシーズンも並行し人工芝でのオンラインを実施しました。人工芝でのスロープ用のレール、BOX アイテムは雪上ではなくても効果的な練習が見込まれる半面、エアマットによるジャンプ練習については雪上と違ってエッジコントロールがなく常に一定のスピードとなり、雪上による適応が難しい面がありました。雪上と人工芝での練習と偏らないような練習を今後も取り入れていきます。
- ② 2025 年開催予定（中止）の選考だったため、選手が各自公式大会に出て結果を出すために練習に励みました。大会は HP, SS, SBX の 3 種目で、今年は早くからスキー場がオープンし強化練習に時間を費やすことができました。練習の内容が競技ごとに違うことから練習も分けて実施し、地形や雪のコンディションによってのコントロールの方法など基本的なことから徹底的に練習を繰り返しました。結果公式大会でも好成績を収めることができた一方で、フィジカルでは基本的な体づくりが足りない選手も多く強化の必要性を感じています。
- ③ 体力測定は他のチームと合同で実施する方法で開催。他の選手と測定することで新たな刺激を受けるなど向上心が高まりました。特に雪上競技はケガが多いこと、比較的年齢の高い選手が基礎体力を維持するために必要なトレーニングが何か意識付けとなりました。次年度も同様の方法を取り入れ適宜実施していく予定です。

(3) 事業に対する評価

(4) 課題と今後の取り組み

【課題】タレント育成選手の発掘、育成

【取組方法】

- ① 今後もスカウト活動を継続していきます。具体的には、SNS 等を通して体験合宿の PR を行う等選手募集の宣伝機会を増やしていきます。
- ② 地元の聴覚障がい者協会と交渉し、スノーボード教室の企画を立てていきます。

4. カーリングチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿：	13 回
海外合宿：	0 回

■体制整備事業

強化会議：	5 回
メディカルチェック：	1 回
タレント発掘・育成：	0 回
JPC 等会議出席	1 回
その他：	0 回

■DX 化促進事業	4 回
-----------	-----

(2) 事業の成果

「選手強化活動事業」である国内強化合宿は前年度と同じ実施回数となりました。強化指定選手と強化スタッフに入れ替わりなく継続し強化合宿を行えたのは事業の成果と考えます。

「強化活動のDX化促進支援事業」は、デジタル機器を用いてデリバリー等を動画撮影し分析を行うという初めての試みを行いました。

2025 年 4 月ミネアポリスにて開催予定のデフカーリング世界大会に向けて選手の競技力を強化しました。

(3) 事業に対する評価

競技力向上において、前年度と同じメンバーで強化合宿を実施できた。国際大会へ出場した経験のあるコーチを引き続き招聘できたことは評価できると考える。また、世界大会に向けて海外手話通訳の実績ある通訳者の調整も行えた。

(4) 課題と今後の取り組み

① 強化指定選手や強化スタッフの発掘・育成

選手や選手を支援するスタッフなどのメンバーを継続的に拡大していきます。選手は積極的に講演等で冬季デフリンピック出場経験をもとに広報活動を行っています。

② 日本カーリング協会との関り

前年度同様、デフカーリングのアスリート育成は、デフスポーツの中では充分に行えないため、日本カーリング協会の各委員会の委員と連携しデフカーリング選手の育成、チームの体制整備を行いたいと考えています。